

バラのロックウール栽培におけるアザミウマ類の防除対策

県内のバラ産地で発生しているアザミウマ類の被害を防止するためには、増殖源となる不要花を周年除去することが重要である。また、アザミウマ類の防除には、生物農薬や栽培環境等の改善も含めた総合的病害虫管理（IPM）が大切であり、今回策定した「IPM 実践指標」を参考に、取り組める項目から実践するとよい。

成果の内容

1 バラ施設におけるアザミウマ類発生実態調査

- (1) 県内のバラ施設で発生しているアザミウマ類の種類は、ヒラズハナアザミウマ（以下、ヒラズ）とミカンキイロアザミウマ（以下、ミカンキイロ）である。多くの施設ではヒラズが単発し、一部の施設ではミカンキイロの単発、または、ヒラズとミカンキイロが混発している（図1、2、5、6）。
- (2) ヒラズは冬期に生殖休眠すると考えられていたが、休眠せずに1～3月に幼虫が発生している。また、蛹化場所として不要花を利用しているため、不要花の除去は周年実施することが重要である（図2）。

2 多様な防除技術の確立

- (1) チャック付きポリ袋を使用したアザミウマ類の簡易薬剤感受性検定法を開発し、アザミウマの種類別に薬剤感受性検定を実施した。検定結果から、ヒラズとミカンキイロの薬剤感受性はほぼ同じであり、有効な化学農薬は少ない（図3、4）。
- (2) 生物農薬（メタリジウム菌粒剤）を施設内に連続散布したところ、無処理区と比べ10花あたりの寄生虫数及び寄生花率は、冬期（12月～3月）では約30%、4月以降は約60～70%となり被害防止効果はある程度認められる（表1）。
- (3) 防除コスト低減のために生物農薬1回処理＋米ぬか散布について検討したところ、防除効果は本剤の連続散布と同等であることから防除コストが低減できる（表2）。

3 総合的病害虫管理（IPM）技術の確立

生産者自らが防除対策を評価するための「IPM 実践指標」を策定した。アザミウマ類の防除は薬剤防除だけでなく、総合的な管理が重要である。

成果の活用面・利用上の留意事項

- 1 ヒラズハナアザミウマの蛹化場所となっている不要花の除去を積極的に行う。
- 2 化学農薬は、不要花にも十分に散布する。また、薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
- 3 策定した「IPM実践指標」を参考に、実践指標のできる項目から取り組む。

具体的なデータ

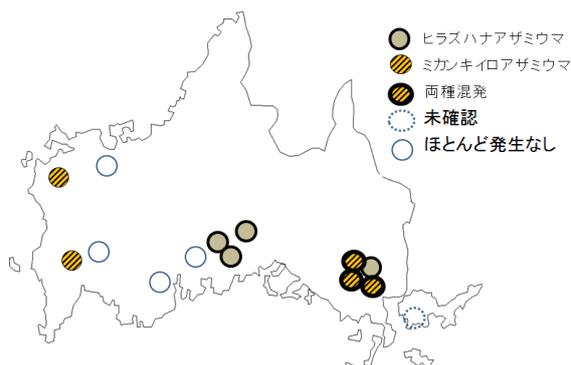


図1 バラ施設のアザミウマ類

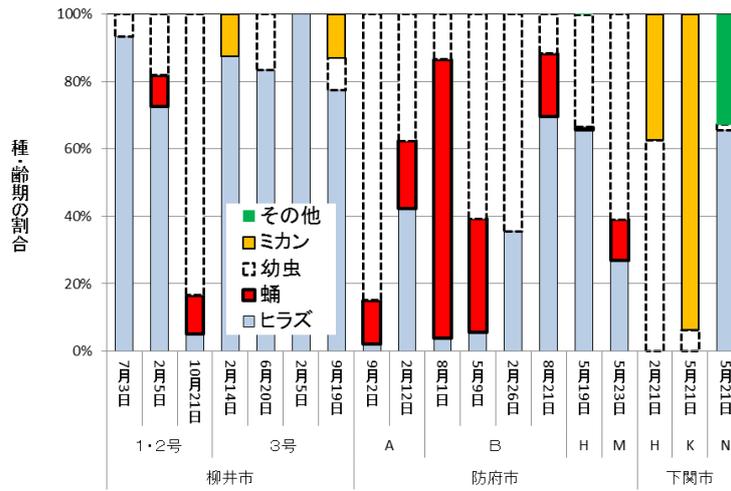


図2 アザミウマの種類・齢期別発生状況

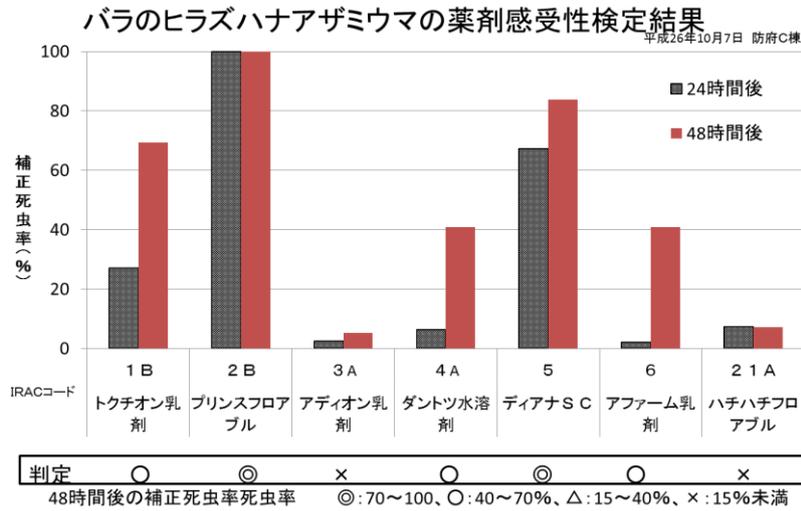


図3 薬剤感受性検定結果 (ヒラズ)

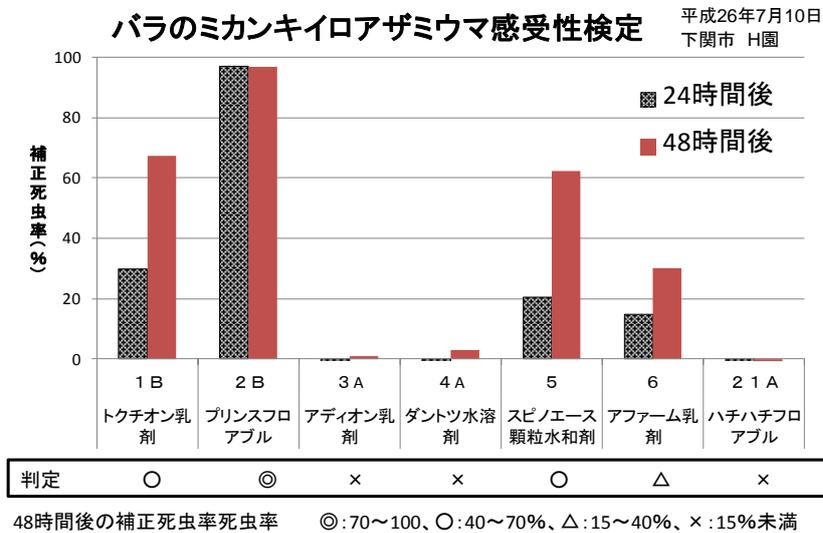


図4 薬剤感受性検定結果（ミカンキイロ）

表1 メタリジウム処理区別のアザミウマ類の寄生状況

	12-3月		4-8月	
	被害花率(%)	寄生虫数(頭/10花)	被害花率(%)	寄生虫数(頭/10花)
無処理	6.6 (100)	1.4 (100)	52.8 (100)	72.5 (100)
1回処理	6.6 (100)	3.0 (215)	54.1 (102)	71.9 (113)
連続処理	1.9 (28)	0.4 (29)	36.0 (68)	40.2 (55)

注1 ()は対無処理比

注2 被害花は100花調査、寄生虫数は10花調査

注3 連続処理は1～2か月間隔で散布

表2 メタリジウム処理区別のアザミウマ類の寄生状況

	12-3月		4-7月	
	被害花率 (%)	寄生虫数(頭/10花)	被害花率 (%)	寄生虫数(頭/10花)
無処理	62.6 (100)	48.7 (100)	48.8 (100)	31.7 (100)
1回処理+米ぬか	31.9 (51)	27.6 (57)	25.2 (52)	18.0 (57)
連続処理	30.2 (48)	41.6 (85)	17.3 (36)	14.7 (46)

注1 ()は対無処理比

注2 被害花は100花調査、寄生虫数は5花調査

注3 連続処理・米ぬか処理は1～2か月間隔で散布



図5 ヒラズハナアザミウマ



図6 ミカンキイロアザミウマ

関連文献等

- 1 平成28年度農林総セ試験研究発表会発表要旨：P41
- 2 日本応用動物昆虫学会第76回大会講演要旨集

研究年度	平成26年～28年
研究課題名	バラのロックウール栽培におけるアザミウマ類防除対策の確立
担当	農業技術部資源循環研究室 畑中 猛・溝部信二・友廣大輔（現 農業振興課）